

フンザの教育事情と子どもたち

辻本雅史

甲南女子大学文学部

1993年8月、パミール高原を南北にはさむ高所辺境のふたつの地点（パキスタン国のいわゆるフンザ、中国新疆ウイグル自治区南西端のキルギス族の寒村）で、子どもの生活と教育事情を調査した。本稿はそのうちフンザでの調査報告である。イスラム教イスマイリー派の結束の強いフンザにおいては、教育は宗教上の精神的首長アガ・ハーンの財団によって積極的な近代化が推進され、大きな成果をあげつつある。その実情と特徴を報告し、今後の可能性を展望する。

1 フンザの概要

パキスタン国に属するいわゆるフンザには、かつて藩王支配のフンザ王国があった。1947年のパキスタン独立後、インドとの係争地であったフンザ王国は、ムスリムが圧倒的多数をしめることから、パキスタンへの帰属を選択し、パキスタン連邦政府の保護下にはいった。パキスタン政府は、イギリス統治時代にならって王政を認めて間接統治を続けた。1974年に平和のうちに王政が終結、現在「北方地域」行政区に属している。

フンザに対するパキスタン中央政府の関心はいまのところ高くないようにみえる。その理由として以下の点が想定できる。(1) 長く続いた間接統治の伝統と気風が現在もなお強く残っていること。(2) フンザの宗教は、パキスタンで圧倒的主流派のスニ派ではなく、シーア派のうちでもさらに少数派のイスマイリー派（さらにニザール派のホジャ派系）であること。イスマイリー派の宗教的最高指導者は、現在パリ在住のアガ・ハーンであるが、フンザ住民のロイヤリティは、パキスタン国よりアガ・ハーンに対する方がはるかに高い。(3) フンザは民族的・文化的にもきわめて少数派であること。フンザには、ワーヒー・タジク族、ブルーショウ族、シナーキー族などが地域や村ごとに住み分けている（月原1993）。(4) フンザは自然条件が苛酷で、かつ交通の容易でない高所辺境地（標高1500～2500m）に位置し、生

産力がきわめて低く、人口の過少な地域（4～5万人）であること¹⁾。1億以上の人口をかかえるパキスタン政府にとって、狭隘なフンザなど、ほとんどケシ粒にひとしい存在であろう。

フンザ住民の居住区はインダス川の源流域、標高1500mから2500mまでの高地にあり、多くの氷河をともなったラカポシ（7788m）・ディラン（7273m）・シスパーレ（7610m）などの美しい高峰に周囲を囲まれている。極度の乾燥地のため、地表の大部分は乾ききったガレキと岩ばかりの斜面でおおわれている。フンザ川沿いの扇状地形のわずかの平地に点在する集落は、上方の氷河から用水路で導いた水をたよりに辛うじて農業と牧畜の生活を営んでいる。

集落はポプラ・柳・アプリコット（あんず）などの植林がなされ、畑にはじゃがいもや小麦・大麦などが主に栽培されている。牧畜はヤギ・ヒツジ・ウシの放牧が行われている。なお山の上方には適度の降水量があり、極度の傾斜地になっているその部分にのみ帯状に森林がつづいているが、そこに夏用の牧草地があるという。しかし下方からはうかがうことはできない。

フンザ川沿いのいわゆるフンザは大きく3つの地区にわかれている。下流にあたる南のギルギット周辺はインド語派ダルト語群シーナー語を話すシン人が、フンザ中心部（カリマバードおよびアリアバード）にはブルシャスキー語を話すブルー

ショー人が、そして上流部のゴジャールにはワーヒー語 (イラン系) を話すワーヒー・タジク族が居住している。われわれの調査は、ゴジャール地区を中心にカリマバードの一部も含めておこなわれた。(以上、月原、1993)

2 フンザの学校教育

パキスタンの現在の学校制度は、図1に学校系統図で示しておいた。

初等学校 (小学校) は5歳から10歳までの5年間、それは無償を原則とする義務教育となっている。(なお2年間の就学前の教育もある)。1970年代には初等教育の国有化政策が進められたが、劣悪な教育状況のために、1980年代以降私立学校の増加が顕著に進み、おもに中産階級子弟の需要に答えているという (寺谷、1987)。義務教育であるはずの初等学校の就学率は、パキスタン全国の平均では、38パーセント (1989年現在で男子49%、女子27%) にすぎない (渋谷、1993)。

中等教育は、3年間の中学校と2年間の高等学校である。中等教育の就学率は1983年現在、中学校で26パーセント (男子35%、女子14%)、高等学校で16パーセント (男子21%、女子9%) である (渋谷、1990)。初等・中等のこれらの10年の教育ののち、2年間の中間カレッジと専攻の種類によって就学年限の異なる大学がある。

パキスタン全国のこうした教育の平均的状況と比較すれば、以下に示すように、高所辺境地フンザでの教育の水準と普及は、驚くべき進んだ状況を示してくる。

3 フンザの学校

われわれの調査した1993年8月現在で、フンザには84の小学校もしくは併設中学校 (ミドル・スクール、5年制の小学校に3年制の中学校を統合した学校) がある。それをその設置母体の違いをもとにすれば、以下の3種類の学校に分類できる。

(1) <公立の小学校> (5年制)、すなわち政府の設立になるgovernment school。この公立小学校が35校存在する。本来は無償が原則の義務教育であるが、われわれの聞き取りでは、保護者は月額2~5ルピー (1993年8月現在、1ルピーは

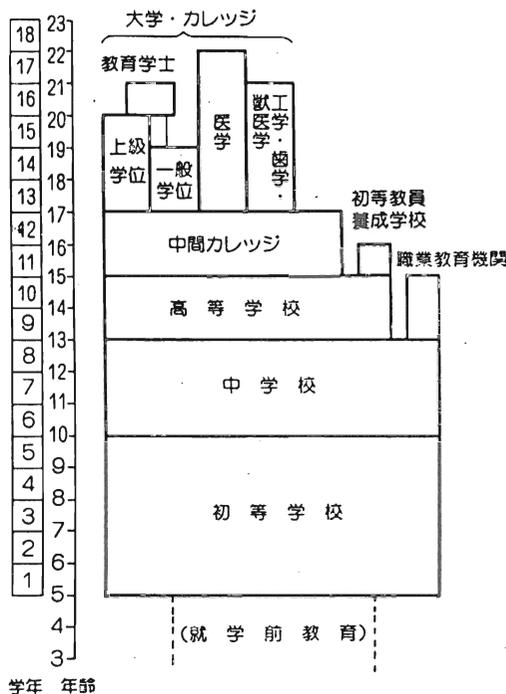


図1 パキスタンの学校制度 (大学院除く)
(渋谷、1993による)

約4円)の授業料を負担しているという。学校で使われる言語は当然国語のウルドゥー語が使用されている。英語の学習は本来の規定では6年生 (中学生) からとなっているのだが、早期に英語教育に取り組む私立学校 (ほとんどで小学校低学年から) の影響のため、近年は早まる傾向にあるという。授業料など保護者の負担する教育経費は低廉だが、教育内容や教育水準および学校施設などはかなり劣悪で、住民の支持は低い。グルキン村の公立小学校の場合、通学児童は35人にすぎない。他の私立に較べて不人気ぶりを反映している。

(2) アガ・ハーン財団のAKES (the Aga Khan Education Services)の設立になるアガ・ハーン学校が公立の小学校と同数の35校ある。宗教上ともいべきものだが、法律上は私立学校に分類されるものであろう。授業料は月額25ルピー。それに入学金としてひとり1000ルピーを必要とする。学校内での言語はウルドゥー語 (国語) が使

われ、民族語は補助的に口頭で使われる程度である。アガ・ハーン校はおおむね児童・生徒数100人以上の規模をもち、アガ・ハーン・ハウジング・ボードの援助によっていずれも明るい洗練された校舎を誇っている。それは村のなかでモスクとともにひととき美しい建築物を見せている。この学校に対する住民の支持と評価はすこぶる高い。

(3) 政府からもAKESからも援助をうけない私立学校が、14校をかぞえる。なかにはカリマバードのフンザ・ロイヤル・アカデミーのように旧王室(ミール)の寄付によって設立された学校の例もあるが、多くはコミュニティ・ベースによる設立が一般的である(たとえばグルミットのアル・アミン・モデル・スクールなど)。このタイプには私立の自由さがあるためか、ウルドゥー語ではなく英語で教える学校が少なくない。授業料は比較的高額となり、通常月額100~150ルピー、英語で教える English school は200ルピーの学校もあると聞いた。

なおグルギットに最近カレッジ2校が開設されたという。

われわれは以下の学校を実際に訪問し(ただし1を除く。1はその校長のアマン氏から聞き取り調査)、授業の見学や学校関係者からの聞き取り調査を行った。なおわれわれの突然の飛び込み調査でも、いずれにおいてもおおいに歓迎された。その点で訪問見学の許可をほとんど得られなかった中国での調査とは対照的であった。

- 1、フンザ・モデル・アカデミー(アリアバード)
[私立] アマン校長より聴取
- 2、フンザ・ロイヤル・アカデミー(カリマバード) [私立]
- 3、アル・アミン・モデルスクール(グルミット) [私立]
- 4、アガハン・D. J. スクール²⁾(グルキン) [アガ・ハーン校]
- 5、D. J. ミドルスクール(パス) [アガ・ハーン校]

われわれは午前中は学校訪問にあて、午後からはゴジャール地区(ワーヒー・タジク族住区)の以下の村を歩き、子どもたちの生活状況の観察と



図2 フンザの私立学校授業風景(フンザ・ロイヤル・アカデミー、カリマバード)

聞き取り調査を行った。

1. グルミット村。約250戸、2000人以上の住民を有する。ゴジャール地区最大の村で、ゴジャールのもっとも南に位置する。村には、私立小学校、私立ミドルスクール（女子のみ）、アガ・ハーン学校（ミドルスクール、共学、英語学校）、公立の高校（government high school、生徒数335人）の、合計4校がある。
2. グルキン村。フンザ川沿いのKKH（カラコルム・ハイウエー）から急傾斜の丘をひとつ越えた谷あいにある戸数105戸、約800人の明るい雰囲気のある村である。公立小学校（男子）、私立英語学校（共学、ミドルスクール）、アガ・ハーン学校（女子、ミドルスクール）の3校が村にある。
3. バス村。75戸、人口660人。ゴジャールの北部、中国との国境近くに位置し、山岳登山やトレッキングの基地の村である。アガ・ハーン学校2校と私立英語学校（タジク モデル スクール）1校の計3つの学校がある。

4 フンザの学校教育の特徴

われわれの学校調査は、結局私立もしくはアガ・ハーン学校のみにとどまり、公立学校の調査

が欠けたのは不十分であった。当初事情がよくわからなかったため、われわれが公立学校の見学を強く要求しなかったこともあったが、現地ガイドは公立学校にはついに案内しなかった。公立学校を見せたがらないこと自体、住民たちの公立学校への明確な評価と受け取ることができる。われわれの調査によってえられたフンザの学校教育に見られる特徴を、以下に示す。

まず第1に、義務教育就学率が非常に高い。アマン校長は約93～94パーセントの数字をあげたが、われわれの調査の印象からして決してそれは誇張とは思われない。パキスタンの全国平均の就学率が38パーセントであることを思えば、フンザのその高さに驚かざるをえない。なおバス村D. J. ミドルスクールの校長は、就学率は100パーセント、非就学児童はいないと自慢したが、これが事実でないことは間もなく判明した。後述の通り、同村で非就学児童に出会ったのである。しかしこの校長の言は、非就学児童がいることを恥じて隠そうとする意識を明白に物語っている。つまりかれらには、男女を問わず学齡児童は就学するのが当然であるとする意識が一般的に存在していることは、疑う余地がない。

なお45年前のバルチット（今のアリアバード）



図3 グルミットのアリ・アミン・モデル・スクール校舎

には、ミールの補助金による小学校が1校、上級学校がもう1校あるものの「娘たちはどんな学校教育も受けていない」状態であった（フィリップ、1988、230頁）。しかしいまやフンザではどの村においても女子の普通教育は常識化しているのである。

第2に、教育経費が多くかかっても、私立およびアガ・ハーン学校へ通学させている。逆にいえば政府の公立学校は低調をきわめている。なお私学優位は、フンザに限らぬパキスタン都市部にも共通した近年の傾向である（寺谷、1987）。

第3に、フンザの子どもたちが学校教育を受けることの意味についてどうしても指摘しておくべきことがある。小学校では、使用言語は通常は国語のウルドゥー語であり、私立の一部で英語が使われている。しかし、住民の生活言語は狭いフンザにあっても各民族によって異なる上に、それらは言語系統を異にしており、相互に通用性はない。グルミットから上流（フンザ北部）のゴジャール地区に住むワーヒー・タジク族はワーヒー語、フンザ川北岸のカリマバードおよびアリアバード一帯の中央フンザ地区に住むブルーショー族はブルーシャスキー語、ギルギット近くのロウアー・フンザ地区に住むシナーキー族（シン人）はシー

ナー語（ダルト語群シーナー語）が使われている（月原、1993）。しかもそれらの言語は口語として通用するのみで、表記すべき固有の文字をもっていない。したがって学校で使用されるウルドゥー語も、大多数の児童にとっては事実上の「外国語」にほかならない。かれらにとって学校教育をうけるということは、「国語」学習においてすら異文化を学ぶということにひとしいのである。少なくとも学校教育のなかには、かれらの民族的・文化的アイデンティティを満たすものは何もない。逆に学校教育は、みずからの生活や文化から離陸し、「近代」という異文化を学習する過程に他ならないという点を、われわれは見逃してはなるまい。

第4に、教育の重点は調査のいずれの学校でも共通していた。第一は英語およびサイエンス（数学や科学）、ついで国語のウルドゥー語やイスラミア（アラビア語イスラム教育、コーランはアラビア語で書かれており、翻訳は不可）であった。まさに先の第3に指摘したことを反映して、学校教育は近代諸国の言語たる英語と近代科学に第一の価値を与えているのである。欧米的近代への道が、学校教育のうちに敷かれているのである。

なおわれわれはヨーロッパから派遣されている何人かの男女英語教師に出会った。アガ・ハーン



図4 アガ・ハーン・スクール（バス村）の校門

校もふくめたフンザ全体の私立学校で、現在9人のヨーロッパからの若いボランティア教師を受け入れていた。かれらには校長の給与（月額3000ルピー）より高額の3750ルピーが支払われているという。ちなみに一般教員の給与は1600～1800ルピーであった。私立ヤアガ・ハーン校では小学1年（5歳）から英語教育を始めていることと併せて、英語教育にいかにか力をそそいでいるかを示す事実である。

第5に、期待されるライフコースはどの学校でもハンでおしたように共通していた。すなわち高等教育を受け、ハイ・オフィサー（高級官吏）として故郷に帰ってくるのが真っ先にあげられた。それはアガ・ハーンの強い奨励にもとづくという。またグルキン村のアガ・ハーンの女子校（D. J. ミドルスクール）で子どもの将来の夢を尋ねたが、学年の違いをこえて“doctor” “nurse” “teacher” の3種の答えしか返ってこなかった。この背後には、しばらく前まで女性の就ける職業がこの3種に限られていたという事情も確かにあるようだが、他方アガ・ハーンの意向の浸透力や「近代化」志向の強さをはっきりと物語っている。

第6に、強い進学意欲があげられる。パス村でのD. J. スクールでは、ハイスクールへの進学率が85パーセント、グルキン村の女子D. J. スクールでは100パーセントとの証言を、各学校の教員から得た。高校の数などからしてこれがどの程度事実であるのか、おおいに疑問の余地は残る。しかし上級学校への進学には、それを実現するためのアガ・ハーン財団による奨学金などサポートシステムが充分確立している。この点は、ギルギットのカレッジの2人の学生およびカラチ大学の学生（いずれも夏休み帰省中）から確認できた。多少とも優秀な学生は、経済状態の如何にかかわらず中等もしくは高等教育機関に進学できる体制がここにはあることは、まちがいない。

第7に、調査のいずれの学校の職員室にもアガ・ハーンの肖像写真（とくに先代の第3世）が掲げられていたが、学校内ではイスマイリー派独自の宗教教育は行われていないという。アガ・ハーンへの絶対的崇敬を基軸においたアガ・ハーン校でさえ、学校内では政府の規定するイスラム教

育に限られ、特別なイスマイリーの宗教教育は行われていない。政府の規制があるのかもしれない。宗派としての宗教教育は、村のモスクではほぼ毎日あるということからすれば、モスクと家庭が宗教教育のおもな場であるとみられる。

5 アガ・ハーンとアガ・ハーン財団の活動

すでに明らかなおと、フンザの教育を考える上で、イスマイリーという宗教とそのスピリチュアル・リーダーとしてのアガ・ハーンをぬきにしては、理解できない。宗教的マイノリティが、宗教的サバイバルの戦略として教育を選択し、地域の文明化的発展を賭けている。そのための組織が、アガ・ハーン財団（the Aga Khan Foundation）である。

アガ・ハーンとは、イスマイリー派のニザール派のさらにホジャ派（もともと西インド地方の商人層に信者が多い）の「イマーム」（預言者直系の子孫であることを根拠にした神聖な最高指導者、精神的首長）の称号である。イマームとしてのこの称号は、イランの王朝に仕えていたハサン・アリー・シャーが1818年に贈られたことに始まる（アガ・ハーン1世）。その孫のアガ・ハーン3世（1877～1957）はカリスマ的指導者であった。西欧的教育を受けたかれは、全インド・ムスリム連盟の創設などイスラム統一組織づくりに絶大な指導力を発揮し、親英的立場を守りつつインドの独立にも大きく貢献した。1937年にはインド代表として国際連盟議長にも就任した。その経済力を背景にヨーロッパ社交界で活躍したことでも知られていたという。かれによってイスマイリー派の宗教的および社会的体制が確立され宗教共同体の近代化がめざされたたのである。アガ・ハーン3世は、みずからの後継者に、長男ではなく孫（長男の子ども）を指名した。新時代の新しい近代的教育を受けた青年（アメリカのハーバード大で優秀な成績をおさめた）というのが、その指名のおもな理由であったという。現イマームのアガ・ハーン4世がそれである。アガ・ハーンは3世以来、世界の信者の住むいずれの地域からも等距離を保つという意図からパリに居住し、そのため現在アガ・ハーン財団本部はパリにおかれている（エンブリー、1980。および日本イスラム協会

等監修『イスラム事典』、1982)。

イマームとしてのアガ・ハーンの権威は絶対的なもので、その絶対性がイスマイリーという宗教信仰上の共同体成立の精神的紐帯となっている。たとえばパス村では、数年前にアガ・ハーンが来村した記念の種々のメモリアルが村の目立つところに数多く見られた。またフンザの祭の中でもっとも重視されているのが、イスラムに共通したイード(断食明けの祭や犠牲祭)ではなく、ほかならぬアガ・ハーンの誕生日であるという。われわれはごく普通の住民の口から、アガ・ハーンのことならばいかなることでもすべてを受け入れると、当たり前のように述べられるのを何度も耳にした。シーア派のうちのイスマイリー派に属するかれらにとって、アガ・ハーンは第4代正統カリフ(シーア派初代イマーム)の血を引く子孫であると信じられ、したがって不可謬なる「生けるイマーム」として絶対的な崇敬の対象とみなされている(山内・大塚、1993)。いうまでもなくここにイスラム教シーア派の宗教的心性がみてとれるが、他方で物心両面においてかれら信者の存在

と生活を支え続ける一定の装置やシステムが強固にあることも忘れてはならない。「アガ・ハーン財団」がそのひとつであることは、まぎれもない。

アガ・ハーン財団を経済的にささえる基金は、主に先進国や国内都市部(カラチやラワルピンジー等の大都市)在住のイスマイリー派信者による寄付にもとづいている。

一般にイスラム教の基本的教義は「六信五行」の形でまとめられるが、ムスリムが実践すべき5つの義務(「五行」)の第3に、ザカートとよばれる貧者への施し(喜捨)がある(山内・大塚、1993)。アリアバードでのアガ・ハーン財団の教育事業の責任者からの聞き取りによれば、イスマイリー派では貧富の区別なく、毎年収入の10パーセントを財団に寄付しているという。つねに「それはもちろん強制ではない」ととくに強調することを忘れないが、しかし信者はその「寄付」を宗教上の「義務」(duty)と意識し、確実に納入されているという。これがこの宗派のザカートである。

アガ・ハーン財団は、いわばこのザカートの受

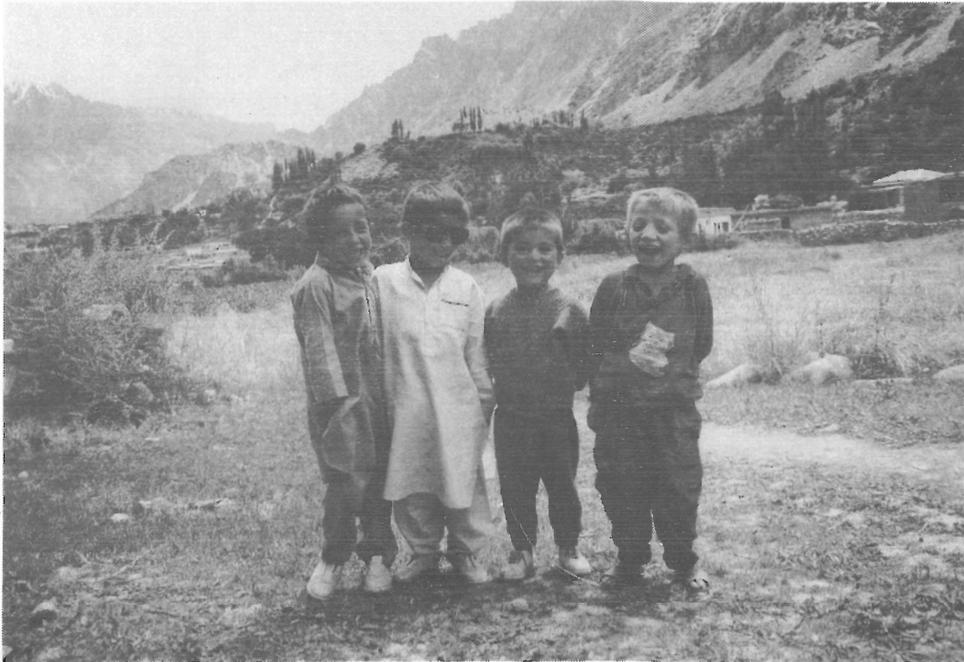


図5 フンザの子どもたち(グルキン村)

入れ団体であるとともに、それにもとづき、貧しい辺境地フンザの宗教的同胞への援助活動を強力に推進する組織なのである。その活動のめざす方向は、すでにみた学校教育に明らかなように、「近代化」の一言に要約できよう。この「近代化」の方向は、すでにアガ・ハーン3世によって示されてはいたが、2世代若い第4世によってさらに本格化した。とりわけ教育、医療厚生、農業の分野が近代化への戦略として重視されている。そのために以下の3つの組織が活発な活動を行っている。

A K E S (the Aga Khan Education Services) ³⁾
 A K H S (the Aga Khan Health Services)
 A K R S P (the Aga Khan Rural Support Program) — A K R S Pは、1982年12月にギルギットを拠点に活動開始し、農業の近代化などに大きな役割を果たしつつある (月原、1993)。⁴⁾

6 「見えざる国家」：国家の枠をこえた共同体

現在「近代化」路線を推進するこのイスマイリー派の宗教的共同体は、ある種の「見えざる国家」という側面をもっているといえるのではあるまいか。というのは、アガ・ハーン財団の学校教育、医療厚生事業、農業(産業)近代化の推進の活動等は、近代社会においては本来国家がなすべき公共的政策にほかならない。しかもその財源が「義務」と意識された「寄付」であり、原則的にはすべての人から徴収されるわけだから、それは機能的には税そのものといってよい。現にイスラム国家ではザカートを国家権力が強制的に徴収した歴史的事実もおおく、これを「教貧税」とよぶ欧米の学者も少なくないという(『イスラム事典』1987)。もちろんこの「見えざる国家」が、対外的主権や司法・立法の機能、地理的な意味での領土といった「近代国家」としての要素をそなえているわけではない。しかし宗教的意識にもとづく求心的な統合力や共同体への帰属意識は、ほとんどいずれの「見える」近代国家よりも強固であろう。少なくともフンザの住民はパキスタンという「見える国家」よりも、アガ・ハーンを精神的首長とする共同体のうちにみずからの存在根拠(アイデンティティ)をより強く感じていることはま

ちがない。

フンザの「近代化」事業に投入するアガ・ハーン財団の資金と組織は、「見える」パキスタン政府のそれを圧倒していることは、学校教育の現実を見るまでもなく明白である。生活の面では貧困を脱していないフンザで、就学率38パーセントというパキスタンの教育現状を尻目に、教育水準がぬきんでているのは、まぎれもなくアガ・ハーン財団事業の輝かしい成果なのである。

いまのところパキスタン政府(「見える国家」)は、財団(「見えざる国家」)と協調的關係を維持しているように見える。財団の側でも、その事業のサービスをイスマイリー信者のみに限定したり、非イスマイリーの住民を排除したりしていない。つまり、政府との協調体制維持に配慮しているのである。結局パキスタン政府の「見える」国家的機能が辺境地フンザにまで十分におよばないことが、かえってアガ・ハーン財団の自由な活動を許していると考えられる。中国では、国家的支配の機能が強力なぶんだけ、宗教にもとづくアガ・ハーン財団のような活動は困難であるにちがいない。

これは、国家の機能と民族的マイノリティもしくは宗教上のマイノリティとの關係を考える上で示唆的な問題であるといえよう。つまり宗教は多くの場合、制度としての国家の枠や境界を越えて広がりともつ。そうした宗教は、主権国家という近代の国家のシステムを相対化する可能性をはらんでいよう。そしてそれは宗教のみではなく、国家の境界をこえて広がりをもつ民族についても事情は似ていよう。その点を逆にいえば、宗教的あるいは民族的マイノリティにとって、国家という存在は本来的に抑圧機構そのものという性格をもっているといえてよい。

7 子どもの教育における伝統と近代：

パス村の2少年をめぐる

われわれはパス村で対照的な二人の少年に出会った。ひとり是非就学の児童、もうひとは高等教育への進学にみずからの将来をかけている勉学少年である。この2少年を素材としてフンザの今

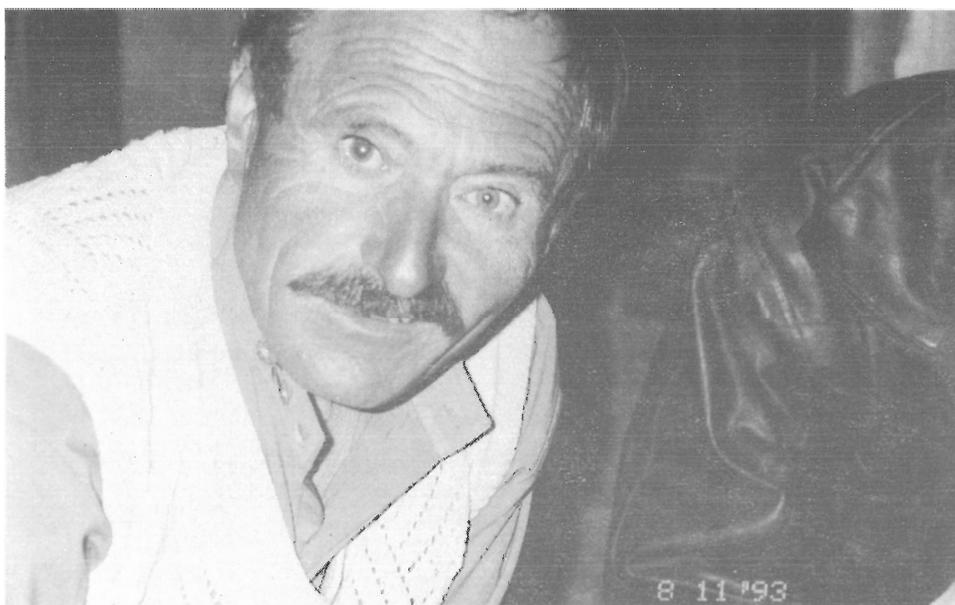


図6 優秀なガイド、カマルジャン

後について、若干の展望をこころみる。

A 非就学児童の場合

ソルタナ・ズムという名の自称10歳の少年に出会った。バス村でかれの方からわれわれに英語で接触してきた。その体格や身のこなしなどから、かれの実際の年齢は10歳とはとても思えない。確実に12～13歳にはなっていると見受けられた。フンザでは年齢の観念はかなりおぼろげで、5歳きざみで数えることが多いという（高知医科大学フィールド医学研究会、1992）ことからして、本人は年齢を偽っているつもりはないにちがいない。

かれは小学校に行かない（行かなかった）非就学児童である。本人もそれを言い、まわりの大人も、かれが学校へは行っていないことを（われわれが教育に関心を示していたためか）、尋ねる前からことさらに強調してきた。そのことでも、学齢期の児童は学校へ行くことを当然とすることが常識化していることを、われわれは確認することができた。

ソルタナ・ズムは、自分はウルタル氷河とシスパール氷河の「マネージャー」であると、誇らしげに主張した。聞くところでは、父が山および氷河のガイドをしているらしい。ただしガイドの仕

事は常にあるわけではないから、常にはホテルの下働きに従っているようである。

かれは簡単で実践的な英語は使える。学校に行ったことがないかれが、英語をどこでだれに習ったかをわれわれは尋ねた。かれの答は何と「ウルタルとシスパールに習った」という。（ウルタル、シスパールはともに山もしくは氷河の名である）。それはどういうことか、とたずねると、「ウルタルは英語を話すのだ」と主張してゆずらない。さらに質すことで父に習ったとの答えを得た。かれは父に伴われて2度シスパール氷河に行ったというから、要するに、外国人とそれをガイドする父とのやりとりを通じて身につけたブロークンな実践英語であろう。確かにやや複雑なやりとりになると、かれの英語の理解能力を越えてくる。

かれの態度と身のこなしはきびきびしていて好感ももてた。人なつつこいが、一定のけじめや節度を失わない。たとえばわれわれ持参のカメラに大いに関心を示すが、許可なしに触ることは決してない。明らかにある種の職業的意識とそれにもなう行動様式を身につけている。

かれの自宅へ案内された。家具や食器、衣類等、粗末で、数量も最少限。台所は七輪一つがぼつんとあるのみ。貧しさは一目で瞭然としていた。



図7 パス村の2少年、ソルタナ・ズム (中央左)、バダー・シャー (中央右)

ソルタナ・ズムは5人兄弟の長男。かれは学校に行かなかった理由として家の貧しさを挙げた。しかし学齢に達したかれの弟妹たちはすべて通学している。とすれば、家の貧しさもさることながら、ガイドなどとして父のあとをつぐ長男に、学校教育は不要と考えられていると思われる。

われわれはこのソルタナ・ズムに、学校へ行かず、しかし子どもの時から職業的自覚を強くもって、自立的に、たくましく成長している姿をみだすことができた。ある種のプロとしての誇りさえもっている。しかしカラコルム・ハイウエーが開通する以前の1世代前では、かれはおそらく普通当たり前の子どもの育ち方であったに違いない。5)

なお1世代前の、こうした方向で成功した典型を、「リッチ」な肉体を誇るカマルジャンという優秀な山のガイドの姿に見出すことができるであろう。カマルジャンは50歳前後の同じパス村の住人で、わが隊の登山班のガイドをつとめた。登山に習熟した今回の調査隊の隊長の松沢哲郎によれば、カマルジャンは技術・体力・人格ともに申し分のない優秀なガイドであったという。外部からくるトレkkerやツアーリストが今後も増加が見込

める限り、ソルタナ・ズムが目指す方向も可能性は少なくあるまい。6)

B 新時代の勉学少年の場合

パス村では、バダー・シャー (Ibadat Shah) という14歳の少年とも親しくなった。かれは、パスのアガ・ハーン系のミドル・スクールで (幼児教室も含めて) 10年学んだ後、現在グルミットの公立高校 (Government High school、ウルドゥー語の学校) の1年生である。朝6時に起きて、なんと片道2時間かけてカラコルム・ハイウエーを徒歩で通学している。いま通学のための自転車がほしいという。

かれは、家庭で夜8時から12時までの4時間の勉強を毎日の日課としている。文字どおりの勉学少年である。いずれカラチ大学に進学して、将来は科学者 (scientist) になり、帰郷して社会につくすという自らのライフコースをしっかりと描いている。この人生設計の実現も十分可能であるような、いかにも知的雰囲気こそなえた目許の涼しげな少年であった。英語の能力も高い。

かれの自宅にも案内された。経済的な豊かさは家の中を一見すれば明らかであった。生活に必要な

とする以上の食器の陳列と立派な家具調度品が目
を引いた。かれの学習コーナーには、ラジオカセ
ットも置かれていた。明るい蛍光灯の照す室内に
は、完璧な身だしなみの18歳の美しい姉（彼女は
数学の教師志望）が、われわれ異国人の突然の来
訪にも臆することなく、ホットミルクでもてなし
てくれた。父の職業は大工で、弟ひとりと両親の
5人家族。なお5人家族は、バス村では最少家族
数であるという。

8 フンザの将来への展望

バダー・シャーこそ、まさにアガ・ハーン財団
の期待する向学心旺盛な教育少年の典型であろ
う。高等教育への進学に自らの未来を賭けている。
「近代化」・文明化戦略の先兵にはかならない。
一方ソルタナ・ズムは、フンザの伝統的な子ども
の育ちかたの延長上に位置していよう。外部から
の旅行者の増加に対応したトレッキング・ガイド
であるから、たんなる伝統のままでないのはもち
ろんにしても、学校教育よりも父のもとでの職業
の体得を優先させるのは、やはり伝統的な生育の
方法である。

フンザの教育の現在、明らかにバダー・シャ
ーのタイプが主流に位置付けられている。アガ・

ハーン財団は、高等教育への進学者には奨学金を
おしまず支給するシステムをもっている。20年後
には間違いなく、バダー・シャーのような高等教
育をうけた世代がフンザの新たな担い手になって
いる。その20年後のフンザあるいはゴジャールの
姿は、どのように変貌しているであろうか。

苛酷な自然環境と平野部の乏しい低生産力のフ
ンザ地域が、いかなる「近代化」を達成するか⁷⁾
加えて、民族・文化・宗教のいずれの面でもマイ
ノリティであるかれらに、アガ・ハーンの指導は
いかなる展望をきりひろくであろうか。

はたしてかれらは、財団の期待するようにこの
フンザの地に帰郷してくるだろうか。教師・医
師・行政官僚などの仕事がある限り、一定の人は
帰るであろう。またカラコルム・ハイウエーによ
り、中国とのビジネスチャンスは確実にひろがり、
その拠点としてのフンザの重要性が高まることも
疑いない。さらに外国人への開放政策は、そのめ
ぐまれた自然の景観などにより確実に旅行者を増
加させ、経済的な豊かさは増すに違いない。日本
人にも「桃源郷フンザ」として紹介され、すでに
現在でもツアーの企画が少なくない。帰郷する条
件は今以上に増加することは確実である。

しかし一方それ以上に、都市部においてあるい



図8 バダー・シャーの勉強風景

は国境を越えて活躍する道を選ぶ者も増加してくるようになる。しかしその場合でも、かれらがイスマイリーの宗教的共同意識を変えないかぎり、アガ・ハーン財団のシステムにより、つねにフンザやゴジャールの同胞を支え続けるであろう。

とすれば、現段階では、アガ・ハーン財団の近代化の戦略(医療、農業改善、教育の普及と高度化)は相当に成果を収めつつあるように見える。アマン校長が典型であったように、われわれが接した教育関係者には、積極的な意欲と使命感さらには明るさを感じられた。迷いがなく、確信に満ちている。子どもたちからも同様の意欲と開放的明るさを感じることができた。アガ・ハーンというイマームの存在とアガ・ハーン財団という組織が、かれらの意欲に満ちた確信を、物心両面でささえているのである。「桃源郷」といわれる心地よさは、美しい自然の景観のみでなく、この開放的な明るい雰囲気も大きく作用しているように思われる⁸⁾。

以上の意味で辺境地フンザの当面の未来は、パキスタン本土より案外明るい展望がもてるかもしれない。

ただ、問題は一定の「近代化」がもたらされた後にあるように思われる。

今のところパキスタン政府はフンザへの関心度は低く、また政府への求心力の弱さも手伝って、さして悪い関係でもないように見える。おそらく人口5万人に満たない極小地域ゆえ、大きな問題を起こさない限り、当分こうした状況が続くものと思われる。

しかし以上に見てきたようなフンザの高度の教育の普及は、一定の経済的蓄積のみでなく、意識の面での成長や中国開放政策によるフンザの重要度の増加などにより、やがてフンザは無視できない重みをもたずにはないように思われる。その時パキスタン政府とどのような関係になるか。宗教による立国という特殊事情の中、<宗教的多数派>対<少数派・異端>、あるいは<みえざる国家>対<制度上の実際の国家>の緊張など、多くの微妙な問題を含むにちがいない。

また、フンザの「近代化」つまり消費文明の浸透は宗教の質を変えることはないであろうか。一

般に「近代化」(消費文明の浸透や都市化・情報化)の進行は、前近代の共同体を解体する方向に機能してきたし、また宗教や信仰の無力化も促進する方向に機能してきたのだが、イスラムとくにイスマイリー派が例外であるとする根拠はあるのだろうか。逆にいえば、宗教的アイデンティティや共同体意識を保持しつつ、いかに近代化が達成されるか。そして既成の近代国家のシステムといかなる関係をとるのか、まさに近代国家のシステムが揺れ動いている現代において、次の時代の宗教と国家や民族の関係をうらなう「実験」ともみなし得る。そうした意味でいまフンザで取り組まれているこうした「実験」は、今後大いに注目にあたいすると思われる。

註

- 1) フンザ地区の全体の人口は必ずしも明確ではない。アマン氏(Aman Ullan Khan、フンザ地区の私立学校連絡会会長)からのわれわれの聞き取りによれば、4~5万人で、100年前のおよそ10倍になるという。ただしグルミット村の村長の言では3万人(宮田、1992、『長寿伝説の里』)、また3万5000人という説もある(広島、1987、『もっと知りたいパキスタン』)。フンザでは戸籍がまだまだ十分には完備していない。これが人口が確定しえていない最大の理由であろうが、さらにフンザの地域的な限定が必ずしも厳密ではないということも影響していると思われる。ここではフンザ全体をみわたす立場にあるアマン氏(カラチ大学卒の地域の尊敬されている指導的立場の知識人)の数字をもっとも信頼できるものと考えておきたい。なおちなみに45年前の1948年に当地を旅したフランス外交官夫人の伝聞記録では、人口およそ2万人と記されている(フィリップ、1988)。
- 2) D.J.とは、Diamond Jubileeの略である。先代のアガ・ハーン3世の即位60周年を慶賀する意をこめて名付けられたようである。
- 3) 詳しいことはわからないが、45年前にはすでにアガ・ハーンの援助になる上級学校がフンザの王都で営まれていた。教育などに対するこうした信者住民へのサポートシステムの伝統があったことが確認できよう(フィリップ、1988)。
- 4) かつての日本の場合、「生き神」である天皇を国民統合の基軸にした天皇制のもと、近代化の戦略として教育と産業化(工業化)が推進された。このことを参考にすると、イスラム世界における「近代化」という点で、イスマイリー派という宗教の特質に興味深いものを感じる。
- 5) ただ「氷河マネージャー」をみずから標榜し、ブロークンの英語で外国人に接触を求めるかれの姿は、就学が当たり前とされるようになった現在、通学できないという負の意識を、ことさら職業的自立

の意識によって逆転させようとしている、とみることもできる。一種の懸命な背伸びをした健気な少年の姿という印象が強かった。

- 6) なお今回の我々の調査旅行をアレンジしたフンザ人ナジール・サビブ氏（パキスタンを代表する優秀な登山家で、登山ガイドの事業化に成功した実業家でもある）や、ハキカット・アリ氏（バス村の元小学校教師、20年前解禁後のフンザにはじめて入った松沢哲郎隊のガイドをつとめ、後にフンザ関係のトレッキングのガイドブックを2冊刊行した。またワーヒー語を文字表記したテキストを初めて作成した人物でもある。1992年病没。松沢・高木、1973）も、こうした側面をそなえた上に、高等教育による知性を身につけ、地域の人から尊敬を集めている地域のリーダーである。
- 7) ここでいう「近代化」とは注釈がある。今のフンザ自体、パキスタンという近代システムが一応機能している国家の枠内にある以上、既に「近代」にはちがいない。したがってここでの「近代化」とは、主に産業化と生活の面での文明化と考えておく。
- 8) ただしかれらの生活水準はまだ低く、また子どもたちの栄養状態も決して良好とはいえない。とりわけ目の病気が目立った。改善すべき現実的な問題はまだまだ山積しているように見える。

引用文献

エンブリー、エインズリー・T. 「アガ・ハーン3世」、桑原武夫編集代表『世界伝記大事典』1980、ほるぷ

出版

- 高知医科大学フィールド医学研究会 編『長寿伝説の里』1992、高知新聞社
- 小西正捷編『もっと知りたいパキスタン』1987、弘文堂
- 渋谷英章「パキスタンの教育」、『新教育学大事典』第5巻1990、第一法規
- 渋谷英章「パキスタンの教育」、『現代学校教育大事典』1993、ぎょうせい
- 月原敏博「フンザ、ゴジャールの文化地理ノート」、『ヒマラヤ学誌』第4号、1993：p.35-46
- 寺谷頼之「子供のしつけと教育」、『もっと知りたいパキスタン』1987、弘文堂
- 日本イスラム協会ほか監修『イスラム事典』1982、平凡社
- フィリップ、アンヌ、吉田花子・朝倉剛訳『シルクロード・キャラバン』1988、晶文社
- 前嶋信次・加藤九祚 編『シルクロード事典』1993、芙蓉書房
- 松沢哲郎・高木真一「解禁後のフンザに入る」、『岩と雪』第34号、1973：p.86-92
- 松林公蔵ほか「京都大学ヒマラヤ医学学術研究計画1991第5次隊（フンザ・カラコルム）報告」、『ヒマラヤ学誌』第3号、1992：p.83-112
- 山内昌之・大塚和夫編『イスラームを学ぶ人のために』1993、世界思想社